

ピア・レスポンスにおける提案に対する書き手の対応

石毛順子 (国際教養大学)

キーワード: ピア・レスポンス, 日本語学習者

問題と目的

ピア・レスポンスにおいて多く使用される機能の文型を日本語学習者に提示する参考にするため、石毛 (2018) は日本語学習者が相手の作文に対してどのように意見を述べているのか分析した。その結果、多く見られた発話の機能は「1. 情報要求・確認, 2. 称賛, 3. 提案, 4. 同意」であった。石毛 (2018) は提案の内容について、語彙の変更や内容の追加を上げているが、語彙の変更は容易に行えるものの、内容の追加は負担が大きいという、字数の制限などの問題も伴う。そこで本研究では、日本語学習者が、ピア・レスポンス後に再提出した作文 (第二稿) においてどのように提案を反映させているか見てみる。

方 法

対象者 日本語学習者を対象とした Writing の授業の受講者。2016 年度春学期 6 名, 秋学期 6 名, 2017 年度春学期 4 名。

調査期間 授業は各週 1 回, 2016 年春学期に 13 回 (ピア・レスポンスは 4 回), 2016 年秋学期に 13 回 (同 5 回), 2017 年春学期に 13 回 (同 5 回) 実施された。

手続き 作文は事前に教員に提出され、教員は語彙と文法に関するアドバイスのみを記入した。授業でアドバイス済の作文を配布し、参加者は全員の作文を読んだ。その後、1 グループ 2~3 名でピア・レスポンスを行った。その際「①クラス全員の中でよいと思った作文はどれか・なぜそう思ったかを話す」「②同じグループの作文でわかりにくいところがあったら質問する」ことを行うように指示されていた。ピア・レスポンスはビデオと IC レコーダーで記録された。

分析方法 ピア・レスポンスの発話プロトコルを作成した。「3. 提案」に含まれる発話を抽出し、提案された側が第二稿でどのように提案を反映させたかを語彙レベルの提案と内容レベルの提案に分けて分析した。

結果と考察

語彙レベルの提案

発話例 1

D: あ, 専門の条件?

C: 卒業, それは,

D: 卒業にしたら『どう』?

C: 『卒業の』条件である。卒業の方がいい?

発話例 1 は C の作文第一稿に対し、D が語彙の提案を行った発話であった。以下のように C は第二稿で提案通りに修正を行っていた。

第一稿: なぜなら, 日本語を話せるようになる必要があるからだ。それは, 私の専門の条件である。
第二稿: なぜなら, 日本語を話せるようになる必要があるからだ。それは, 卒業の条件である。

内容レベルの提案

発話例 2

A: ほう, 法律だけど, なんという, ビルケランド法があります

B: あー

A: 科学, 関する情報ですから

B: あー。それ入ったらいいと思います

E: これは, えっと彼はとても有名, とても重要な人, の印象が

A: うーん, はい

E: 出てくる

B: うーん

A: でもスペースがなかったからー

B: えなんか, なんか二番目の, 内容ちょっと, ちよっと減って, 簡単にして,

A: うんうん

B: 最後, ちよっと

A: はい。分かりました今度こそ

発話例 2 の前にも, オーロラの研究者ビルケランドの紹介を書いた A に対し, A のピア・レスポンス中に話した内容を作文に加える提案を B が行っていた。しかし, A は「スペースがない」と回答した。発話 2 では B は具体的に 2 段落の内容を減らし, ビルケランド法の内容を加える提案も行った。A は「分かりました」と回答したが, 第二稿でもその内容は加えられていなかった。

以上のように, 語彙レベルの提案は書き手にとって取り入れることは容易だが, 内容レベルの提案は, ピア・レスポンス中には受け入れていても取り入れることが困難であることが示唆された。

引用文献

石毛順子 (2018) . ピア・レスポンスにおける相手のプロダクトに対する発話の分析 韓国日語教育学会・言語文化研究学会 (日本) 共同開催 2018 年度 第 34 回 冬季国際学術大会, 117-120.

付 記

本研究は JSPS 科研費 15K02645 の助成を受けている。